

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 30 年 6 月 27 日現在

機関番号：25502

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K13089

研究課題名（和文）過疎地域等で暮らす精神障害者に対する精神保健福祉士の訪問相談援助の評価指標開発

研究課題名（英文）Development of an Evaluation Index for Visits by Psychiatric Social Workers to Mentally Handicapped Patients Living in Depopulated Areas

研究代表者

高木 健志（TAKAKI, Takeshi）

山口県立大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号：40413512

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は中山間過疎地域における福祉的支援について、調査を通じて、仮説的であるが精神保健福祉士の支援の指標評価票の試作まで行うことができた。従来、支援者は、所属機関で業務を行い、その機関に利用者が訪れるという形態が多かった。しかし、中山間過疎地域における支援では、その地理的条件から、専門職が訪問するという支援の形態を取ることが多く、訪問という形態を取る支援ならではの特性と、中山間過疎地域という地域特性とを考慮した支援のあり方が浮かび上がってきた。農山村における福祉的課題に着目したソーシャルワーク実践についての視点として、農村ソーシャルワークの構想についても検討を加えることが出来た。

研究成果の概要（英文）：This study carried out an interview investigation to a supporter about support of the welfare in the depopulated area that became clear from an investigation. The supporter worked with position engine conventionally, and there were many forms that a user visited to the engine. Furthermore, it was hat it was ggested in possibility to be tied to inspection of the effectiveness of the visit-haped support by producing a concrete evaluation index experimentally. In addition, viewpoint of the study about the social work practice that focused on the support of the problem of structure and the welfare of the life of the people who lived in intermediate and mountainous area particularly the farming and mountain village, here, I did it with farm village social work while I pushed forward a study, but was able to add examination about the design of the farm village social work.

研究分野：ソーシャルワーク

キーワード：中山間過疎地域等 訪問支援 精神保健福祉士 農村ソーシャルワーク

### 1. 研究開始当初の背景

わが国の精神保健医療福祉にとって、長期入院の解消が、大きな課題である。

精神科病院の退院先は、特に、入院から1年までの患者の場合は、家庭復帰が7割に及び状況にあることが明らかにされている。

このように実際には、退院後の退院先に「家庭」が上位を占めている。他方で、家庭が都市中心部にあるとは限らず、さまざまな地理的条件に仮定があることと考えられる。

つまり、その家庭がどこにあるのかという場合は、さまざまな地理的条件にあるものが推定され、たとえば中山間過疎地域等に家庭がある場合には、中山間過疎地域等に退院する場合がある。

そこで、中山間過疎地域等であっても安心して退院できる地域生活支援の環境を整えることは重要な課題であると考えた。

環境の一つとして、地理的条件が厳しい中山間過疎地域等における具体的な支援として、精神科訪問看護をはじめとした訪問型の支援が重要や役割を果たすと考えた。

一方で、中山間過疎地域等の精神障害者を支援する精神保健福祉士のための訪問による相談支援の評価指標は見当たらなかった。

そこで、本研究では、中山間過疎地域等においては、訪問型の支援において有効な相談支援の評価指標を開発する必要があると考えた。

### 2. 研究の目的

本研究は、過疎地域等で暮らす精神障害者に対する精神保健福祉士の訪問による相談援助の評価指標の開発を目的とする。

中山間過疎地域等で暮らす精神障害者の生活支援には、精神保健福祉士が訪問することによる支援が有効である。研究代表者は、精神保健医療福祉の視点から、交通を含む社会資源に乏しい過疎地域等における精神障害者の生活の場への訪問による精神保健福祉士の相談支援が過疎地域等における精神医療福祉問題に対する有効な解決のための急務と考えた。

そして、これらの調査結果をふまえて、精神保健福祉士による過疎地域等における相談支援の評価指標を開発するものである。

### 3. 研究の方法

本研究は、研究期間中に、次の計画で取り組んでいった。

まず、精神科訪問看護に従事する支援者への調査を行い、訪問型の相談支援の現状と問題点を明らかにしようとした。

そして、中山間過疎地域等を圏域とする精神科訪問看護に従事する精神保健福祉士への調査を行い、過疎地域等特有の相談支援の現状と問題点を明らかにしようとした。

それらをもとに、精神保健福祉士による過疎地域等における相談支援の評価指標を開発することを目的としていた。

そのために、本研究期間中は、次の内容と年度ごとの調査を実施した。

まず、研究期間中、継続的に先行研究調査を行った。訪問看護、ソーシャルワーク、農村社会学等多様な領域における中山間地域、農山村地域に関する文献調査を行うことができた。

#### (1) 2015年度

初年度、精神科訪問看護等の訪問型の支援についての基盤的知見を得ることを目的に、精神科訪問看護の経験がある支援者に対して、インタビュー調査を行った。精神保健福祉士、保健師、看護師であった。調査結果は、定性的コーディングの一部を用いて分析した。その結果、訪問型の支援についてのプロセスとその構造を明らかにすることができた。

具体的には、訪問支援における支援者の実践について明らかにすることを目的とした。探索的調査と位置づけ、データのバリエーションの豊かさに注目する質的方法を採用した。インタビュー調査で得られたデータは佐藤(2014)による「定性的コーディング」の方法の一部を参照して分析した。

4名の支援者からの調査協力を得た結果、訪問支援を行う支援者の訪問支援に臨むにあたっての用意と訪問支援における支援者の実践が導き出され、訪問支援における支援者の実践プロセスについて仮説的に明らかにすることができた。

#### (2) 2016年度

次年度は、調査協力を得られた精神科医療機関に勤務する11名の精神保健福祉士に対して、インタビュー調査を実施した。調査結果は、質的分析方法を用いて分析した。

その結果、精神保健福祉士による訪問型の支援の実践についてカテゴリー化を行うことができた。

#### (3) 2017年度

最終年度、調査協力を得られた精神科医療機関に勤務する6名の精神保健福祉士に対して、インタビュー調査を実施した。この調査では、前年度に実施した調査結果から、中山間過疎地域等に居住する精神障害者への支援をモデルとした架空の事例を作成し、その事例に基づき、インタビュー調査を実施した。

調査結果は質的分析方法を用いて分析した。その結果から、中山間過疎地域等における精神保健福祉士による支援の仮説的な評価指標案の作成に取り組んだ。

### 4. 研究成果

#### (1) 中山間過疎地域等における訪問支援の可能性

本研究の結果から、中山間過疎地域等で生活する精神障害者にとって、支援者が生活の場へ出向く訪問支援は大きな可能性を持つ

ていることを考えることができた。

訪問支援を行った経験のある支援者から調査協力を得て、その実践内容に関してインタビュー調査を行い、分析を行った。

訪問支援においては、支援者には必要とされる資質があり、それと具体的活動とが相互に関連しあって、訪問支援の場における実践となっていた。支援者への聞き取りをもとにした分析結果であるため、得られた知見の一般化の可能性を確かめていくには継続的に調査・分析に取り組んでいく必要がある。

しかし、一方で、限定的であるものの、訪問支援における実践内容の一部を明らかにすることができた。得られたデータについて本研究では「訪問支援における支援者の実践内容」というテーマを設定して分析していったため、ほかの要因や要素についても分析し、その経験が支援者にどのような影響を与えているのか、といった点についても明らかにしていくこととしたい。

また、訪問を用いた支援の経験があり、かつ中山間地域等における支援を経験したことのある支援者を対象とした。このことで、ひろく訪問支援の実践に関するデータを得ることができ、その分析に取り組むことができた。今後、調査を継続的に行うなどすることによって、将来的には本結果との比較研究へ発展させていくこととしている。

そしてさらにもう一方には、利用者が住みたい・暮らしたい場所で生活や暮らしが営まれるような支援の方策を検討していかなければならないと考えている。

具体的には、たとえばフォーマルな社会資源が乏しいと考えられる農山村をはじめとした中山間過疎地域等で生活する利用者の生活支援の方策を視野に入れた研究へと発展させていきたい。そのひとつとして、中山間過疎地域等における本研究期間の調査を通じて、中山間過疎地域等、なかでも、現代の農山村におけるソーシャルワーク実践の可能性について検討していく必要性を検討することができた。具体的には、農村ソーシャルワークという検討の可能性について着想を得ることができた（高木 2018）。

## （2）中山間過疎地域等における支援

訪問型の支援の重要性は認識されている。なかでも、交通や生活面でのアクセスが良好な都市中心部と比較して、地理的条件が不利な中山間過疎地域等においては、訪問型の支援が重要な役割を果たしている。

しかし、中山間過疎地域における訪問型の支援に対しては、現実的な課題もあることが明らかになった。

たとえば、支援者が所属する医療機関等から、訪問先までの距離が1時間かかる場合には、対応できる件数や回数に何らかの制約が生じているということであった。具体的に研究結果で提示すると、「訪問回数の制約」という要因である。訪問支援では、回数の制約

という現実的な課題がある。「行けても週1・週3までは行けるけど、実際、経済的なところで制限も出てくるし。」というように、地理的条件が大きな影響を与えて、訪問支援における難しさを産み出す要因となっていることが明らかになった（高木 2017）。

これからの取り組みのなかで、「生活を支える」という使命を、費用対効果という現実的側面からも検討しつつ、実施していくためには、今後検討すべきいくつかの課題が残されている。さらに、今後の重要な検討課題であると考えている。

## （3）訪問を用いた支援

本研究では、訪問を用いた支援を行った経験のある支援者、なかでも、中山間過疎地域等における支援を経験したことのある支援者から調査協力を得ることができた。

調査を通じて、訪問を用いた支援は、利用者の生活の場で行うことから、支援者には、相応の技術や知識があらかじめ要されることが明らかになった。いかなる項態にも備えた支援ができる というカテゴリーであった（高木 2017）。これは、支援者が訪問前に前もって予定していたとおりの支援内容を忠実に実施するのではなく、前もって予定していた支援内容をふまつつも、実際の訪問時には支援内容を予定と変えたりするなど柔軟であることである。さらにこのカテゴリーは「状態を見極める」と「不測の事態に備える」から生成された（高木 2017）。

一方で、訪問を用いた支援においては、具体的に、どのような技術や知識がどれほど必要となるのか、といった点についてはまだ明らかにはなっていない。そこで、今後、これらの点についても明らかにしていく。

## <引用文献>

佐藤郁哉、質的データ分析法 原理・方法・実践 初版第8刷、2014、新曜社。

高木健志、中山間農山村地域における福祉的課題とソーシャルワークとの関連に関する考察：「農村ソーシャルワーク」という可能性、山口県立大学社会福祉学紀要第24号、査読無、2018、pp37-48。

高木健志、中山間地域等における訪問支援の可能性に関する研究 - 訪問支援の経験がある支援者へのインタビュー調査から -、山口県立大学社会福祉学紀要第23号、査読無、2017、pp21-32。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

高木健志、中山間農山村地域における福祉的課題とソーシャルワークとの関連に関

する考察:「農村ソーシャルワーク」という可能性、山口県立大学社会福祉学紀要第24号、査読無、2018、pp37-48.

高木健志、中山間地域等における訪問支援の可能性に関する研究 - 訪問支援の経験がある支援者へのインタビュー調査から - 、山口県立大学社会福祉学紀要第23号、査読無、2017、pp21-32.

高木健志、中山間地域等における精神保健福祉士の訪問型支援の重要性に関する一考察 - 文献研究から考える課題 - 、山口県立大学社会福祉学紀要第22号、査読無、2016、pp119-124.

[図書](計1件)

高木健志、ブイツーソリューション、『多角的な研究アプローチによる現代福祉課題の検証』(分担執筆) 2016年、pp103 - 122.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

高木 健志 (TAKAKI, Takeshi)  
山口県立大学・社会福祉学部・准教授  
研究者番号: 40413512